



田辺栄次郎 ベルピニャンの横小路 -田辺栄次郎展-



短刀 銘吉家 室町16世紀 -蘇る赤羽刀-

■ 前田家の婚礼調度

前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 蘇る赤羽刀

第2展示室

■ 田辺栄次郎展 -南仏の光-

第3展示室

- 3月の企画展示室（各種団体展）
- 情報・図書コーナーより
- 企画展Topics
- ミュージウムレポート
- 平成24年度の企画展をふりかえって
- 所蔵品紹介

蘇る赤羽刀

2月15日(金)～3月23日(土) 会期中無休

前号に書きましたように、赤羽刀とは太平洋戦争終結後、連合国総司令部により接収された刀剣類のうち廃棄を免れたものが東京赤羽の米第八軍兵器補給廠に集められ、その後東京国立博物館に保管された刀剣類です。そして戦後五〇年の平成七年に、国に帰属する分がゆかりの地の公立美術館・博物館等に無償で譲与されました。当館は広く加賀の地で作られた刀剣である加州刀を中心に七〇口の譲与を受け、平成十一年度から順次研磨を行っています。今回の展示では、研磨された十九口を選び、さらに国から譲与された状態を伝える未研磨の二口を加えて、赤羽刀がどのようにして美術刀剣として美しく蘇ったかをご紹介します。

主な展示作品としては、まず本号表紙に掲載し

た「短刀 銘吉家」を挙げたいと思います。加賀にゆかりのある刀工の吉家は、室町時代から江戸時代まで数代にわたり活動していました。本作は、室町時代十六世紀半ば頃に作られたものと考えられます。続いて藤嶋友重に注目したいと思います。藤嶋は越前の地名であり、友重は元来越前の人で、室町時代には加賀に移住し、以後江戸時代をとおして刀剣、槍の制作で重要な働きをしています。今回は室町時代の「刀 銘加州藤原住友重」「脇指 銘藤嶋友重」を展示します。その他に古刀では家次、勝家、新刀では辻村兼若などを合わせて展示し、加州刀の層の厚さの一端をご紹介します。と思います。



短刀 銘吉家（表紙掲載の短刀の部分）

前田家の婚礼調度

2月15日(金)～3月23日(土) 会期中無休

前号では展示概要を紹介しましたので、今回は展示する浴姫所用の婚礼調度の主な作品について紹介します。

「厨子棚」は婚礼調度の中心となる三棚の一つで、平安時代の公家の調度であった二階棚、二階厨子の変化したものといわれ、室町時代に黒棚とともに婚礼調度として、この形式が成立したようです。中世以前、家具というものが発達しなかったわが国の数少ない伝統的調度です。棚にはその主が日常用いる調度が置かれますが、その飾り方に一定の決まりはなく、化粧道具、文房具、香道具などです。「黒棚」は厨子棚と対になる棚で、厨棚（くりや棚・台所棚）から発生したといわれ、化粧道具が置かれます。手箱は平安時代に手

回り品を納めた手元箱でしたが、鎌倉時代以降になると、「拾貳手箱」は、化粧道具を納める手箱となり、鏡箱二合、油入二合、櫛箱四合、白粉箱四合の計十二合の小箱を納めるところからの名称です。「角赤手箱」は大小一對をなし、角赤とは手箱の四隅に布目を見せ、朱漆を施したことからの名称で、中に納めるものは特定されてはいませんが、身の回り品や化粧道具です。

あわせて展示する「姫君入興行列図巻」は、天明七年（一七八七）十代將軍家治の養女種姫が紀州徳川治宝に嫁した際の行列図ですが、この絵巻から浴姫の入興の様子を類推することができます。こうした作品から、大名家の晴れやかな婚礼の一端を感じとっていただければ幸いです。

姫君入興行列図（部分）

今月のみどころ

2月15日(金)～3月22日(金) 会期中無休

田辺栄次郎展 —南仏の光—

2月15日(金)～3月22日(金) 会期中無休

第4展示室 彫刻

今回の展示で今年度最後の展示となります。館蔵品の優品と、本年度中展示の機会が少なかった作家・作品を併せての展示です。なお第4展示室は油彩画とコラボした展示となっています。存在感はあっても色味の少ない彫刻の室に、彩り豊かな絵画との組み合わせは、各作品の新たな魅力発見の機会にも繋がるものとなっています。



和 畝村直久

第5展示室 工芸

塗りを極める―塩多慶四郎・小森邦衛 重要無形文化財保持者(人間国宝)の漆芸部門のうち、漆の加飾技法ではなく、漆の塗りそのもの、素地作りを含む総合的な漆塗りの技術を指すのが髹漆(きゆうしつ)です。石川県では塩多慶四郎氏、小森邦衛氏の二人がこの部門で人間国宝に認定されています。

良質の漆の効果を最大限に生かした、塩多氏のあたたかみのある作品、素地の構造をデザインに応用した、小森氏の端正で理知的な作品を併せて展示し、漆塗りの多彩な表現をご紹介します。



曲輪造三彩重箱 小森邦衛

第6展示室 日本画・書・版画

「春を待つところ」をテーマにした小特集です。この時期に春を待つ風物といえは「梅」を思い浮かべるのではないのでしょうか。梅は古来より画題として取り上げられてきましたが、やはり見どころは、その枝振りと空間の活かし方でしょう。今回の作品中、前田青邨筆「紅白梅図」の自在な遊び心あふれる構成は、色彩と絶妙なハーモニーを生んでおり、必見です。



紅白梅図 前田青邨

当館が所蔵する田辺作品は油彩画十二点ですが、昭和十四年の「見ざる、聞かざる、言わざる」から、抽象時代の「流米」(三十八年)、そして田辺氏のスタイルを決定づける、「リヨンの丘」や「セーヌ川遠望」などの、赤い屋根瓦、白い壁の樹木が交差する、フランスや地中海沿岸の風景画まで、六十年の創作の歩みをうかがうことが出来るコレクションとなっています。

イルを変貌させて行きましたが、この時期田辺氏は夫人の藤井多鶴子氏と共に本県の抽象絵画の旗手として活躍しました。三十一年に渡欧し、パリ画壇に直に触れたことが契機となったのです。その後具象に視点を移し、風景を描くようになりましたが、樹木と白壁と赤い屋根による千変万化の風景画は、抽象時代におけるさまざまな試みが根幹となつていと言えましょう。どことも知れぬ田舎の景色を描くのですが、年月を経て形作られた壁のシミが、人びとのおいを感じさせています。三十年代「シミ」は田辺氏の抽象イメージの源泉となり、その後は石壁という具象に凝固させて画面の構成を担わせたのでした。



南仏 ブッセス (水辺)

3月の企画展示室（各種団体展等）

第8・9展示室

日中干支（えと）の漢字展

3月8日(金)～3月11日(月)

◆入場無料 十七時終了
主催 北枝篆会、中国人民対外友好協会
共催 石川県日中友好協会
協力 北國新聞社

本年で二十年目を迎える文字をテーマにした日中文化交流展です。今回は干支の漢字をモチーフにして、書と篆刻作品を約一〇〇点展示します。十干の漢字「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」と十二支の漢字「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」は古代中国殷代の甲骨文からすでにあったものですが、十二種類の動物との関係は未だにほとんど解明されていません。この思想は日本人はすでに奈良朝に入ってきており、正倉院御物の中にも見ることが出来ます。おなじみの十二種の動物に関わる成語や方位や時にも反映されたこれらの漢字を作品にしました。中国人民対外友好協会の協力で出品された中国側の作品と合わせ、両国の表現の違いを楽しんでいただければ幸いです。

第7展示室

金沢大学 学校教育学類 美術教育専修 卒業制作展 大学院 教育学研究科 修了制作展

3月2日(土)～5日(火) 会期中無休

◆入場無料
◆連絡先 金沢市角間町
金沢大学人間社会学域学校教育学類
江藤 望
TEL 〇七六一二六四一五五八二

絵画、彫刻、デザイン、美術科教育の各分野の学士課程、修士課程による平成二十四年度卒業・修了作品を展示します。これらは、主に教職を目指す学生が、自らの学生生活の総決算として地道に努力を重ね、且つ創造的に研究し制作して完成させたものです。展示点数は四十五点、未熟ではございますが是非ご覧下さい。

そして忌憚のないご批評、ご助言をお願いします。

本校芸術コース美術専攻は『美術系大学への進学に対応した実技力の育成』を目標に、昭和六十一年に創立以来、美術の基礎・基本の定着と質の高い造形表現力の育成を行ってまいりました。卒業生は金沢美術工芸大学をはじめ全国の美大・芸大・国立大教育学部へと進学し、現在、絵画、彫刻、工芸、デザイン、映像、アニメーション、現代美術、さらには教育界など、地元石川や全国の美術文化の担い手として活躍しております。

この展覧会は、今年度卒業生二十三名が本校での学習成果を発表するもので、日本画、油絵、彫刻、デザインの四専科から一人二～三点を展示発表します。この機会を通して美術専攻生徒と本校美術教育にとっての一層の成長への励みにしたいと考えております。

3月2日(土)～3月5日(火) 会期中無休

第25回 石川県立金沢辰巳丘高等学校 芸術コース美術専攻卒業作品展

第9展示室

3月8日(金)～3月21日(木) 会期中無休

第36回 伝統九谷焼工芸展

第7展示室

昭和五十一年に認定された石川県指定無形文化財保持団体九谷焼保存会が、技術保存・発展向上を図るための事業として毎年行っている公募展で、今回は三十六回目となります。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

◆入場料 一般 三五〇円(二八〇円)
大学生 二八〇円(二二〇円)
高校生以下は無料

※(一)内は二〇名以上の団体料金
当館友の会会員は、会員証の提示により団体料金になります。

◆連絡先 能美市寺井町よ二五番地
石川県九谷会館
TEL 〇七六一一五七一一二五

'12 玄土社書展

3月16日(土)～18日(月) 会期中無休

玄土社の前衛書は一九六〇～七〇年代、欧米の抽象絵画と拮抗するものとして、当時最先端の一翼を担っていました。その後日本の前衛書が後退したことにより中央展から退会、以来作品発表は前衛を貫き、古典の厳密な模写にも取り組んで、独自の道を歩み続けました。近年はその姿勢が評価され『COOL JAPAN 日本前衛書』として、世界各地で展覧会を開催しています。今回は抽象作品四十三点、古典模写作品二十二点を展示し、玄土社の一年の活動をご覧いただきます。

◇入場無料

◇会期中の行事

「表立雲トークタイム」

テーマ 東京国立博物館

「書聖 王羲之」展によせて

日時 三月十七日(日) 午後一時三十分

◇連絡先 金沢市本多町一七七一五 玄土社

TEL 〇七六一二六三一〇一二二

当館には各地の美術館・博物館から、多くの展覧会図録が送られてきますが、その中に、宮内庁三の丸尚蔵館(東京)で開催された展覧会図録があり、現在七〇冊を超える数となっています。宮内庁三の丸尚蔵館は、皇室に受け継がれた絵画・書・工芸品などの美術品が平成元年に国に寄贈されたのを機に、作品の保存・管理、調査・研究、さらに一般公開することを目的として、平成十一年に開館した博物館施設です。そのコレクションはさまざまにジャンルを含み、高い質を誇っています。これまで、毎回テーマを設けてコレクションの公開を行ってきており、数多くの興味深い展覧会が催されてきました。

現在は、三月十日まで『明治十二年 明治天皇御下命「人物写真帖」展』が開催されており、先般その図録が届きました。この展覧会は、明治十二年に明治天皇が、深く親愛する群臣の肖像写真を座右に備えようと蒐集したもので、四五〇〇余名の肖像写真が収められています。主に、幕末から明治維新にかけて新政府の

三月の行事予定

■土曜講座		午後1時30分		美術館・講義室		聴講無料	
2日(土)	「美術にみる色―赤―」	西田孝司		担当課長			
9日(土)	「繰り返す意匠 型染と染めの型紙」	寺川和子		学芸主査			
■キッズプログラム		午後1時30分		美術館・講義室集合		参加無料	
3日(日)	特集展示 前田家の婚礼調度 鑑賞講座「お姫様のくらし」						

成立に尽力した人々や、各分野で日本の近代化を担った人々を中心です。図録には、すべての写真が掲載されているわけではありませんが、石川県にゆかりのある人の姿も見られます。たとえば、元加賀藩御算用者で、後に海軍主計大監として活躍した猪山成之(いのやまなりゆき)の肖像写真が掲載されています。猪山成之といえば、平成十五年に出版され、それを原作として二十二年に製作された映画『武士の家計簿』の中心的存在であることをご存じの方も多いのではないのでしょうか。

今回、情報・図書コーナーに、本図録と合わせて、宮内庁三の丸尚蔵館で開催された図録を、ピックアップして開架しますの

で、ご自由に閲覧下さい。
※開室時間は、午後一時～五時。貸出し、コピーサービスは行っておりません。

薬師寺東塔大修理協力・石川県立美術館開館30周年記念・
北國新聞創刊120周年記念

国宝 薬師寺展

会期：平成25年4月26日(金)～6月23日(日)



聖観音菩薩立像 ©飛鳥園

世界遺産に登録された「古都奈良の文化財」の主要寺院の一つ、奈良西ノ京の薬師寺の展覧会です。薬師寺の創建は天武天皇の時代にさかのぼります。都が藤原京から平城京へ移転することに伴って、寺も現在の地に移りました。度重なる火災により、当時の建物は東塔を除いて失われましたが、昭和の大修理で、金堂、講堂、西塔などが復興され、往時の伽藍が甦りました。石川県立美術館開館三十周年と北國新聞の創刊一二〇周年を記念する一大イベントとして、共催により日本海側では初めてとなる金沢での開催となりました。

「聖観音菩薩立像」は、東院堂の本尊で国宝に指定されており、同じ薬師寺金堂に安置される薬師三尊像とならび、金銅仏中屈指の名作として名高い作品です。左手を静かに上げ、胸を張る姿はいかにも万葉の貴公子を思わせます。引きしまった姿、なだらかな隆起による腰のふくらみは、彫刻美の理想とされており、それはまるで血が通っているように感じるほどの美しさで、生命感にあふれています。

下半身を覆う透き通るような薄手の衣の質感は、体の線を強調しながら左右対称の美しい流れを醸し出しています。飛鳥時代後期いわゆる白鳳期の作風を感じさせる名品です。

本展では、ほかに「吉祥天像」「慈恩大師像」など国宝六点を含む四十四点を展示します。日本人の心の故郷ともいえるべき奈良の都。その中心寺院の一つである薬師寺の歴史と美の神髄をご堪能ください。

ミュージアムレポート

キッズ☆プログラム

一月二十日、コレクション展示室で開催の「竹沢基展」の親子鑑賞講座「木炭で絵をかくって??」が行われました。小学生親子が対象の鑑賞講座ということで、まず、油絵の道具をご紹介し、何人かの参加者には、簡単にキャンバスに描く体験もしていただきました。その後、展示室に移動して作品鑑賞です。女性を中心とした油彩画の人物画等が並んだ展示室。この人物画を鑑賞していただくために、アートゲームを行いました。展示作品の中から「この人はこんな人じゃないかな」と思いついた作品について、鑑賞者それぞれの感性で「どんな人かな」カードを書いていただき、それをもとにゲームを行います。子どもたちからは、「ゲームが楽しかった」と好評で、保護者の方からは、絵から「何かを感じ取る」や「想像してみる」という鑑賞方法で、新しい美術の楽しみ方が体験できたとの感想も頂きました。



金沢美術工芸大学で後進を指導されていた時も、竹沢先生といえばデッサンといわれるほど、デッサンを大切にされていたということで、最後は今回の講座のメインイベント、木炭デッサンに挑戦です。デッサンをしてのを見るのも、また、自分が描くものをはじめという参加者の方々。木炭紙や木炭、また、描いたものにちがった表情を与えるガーゼや食パンにも興味津々です。子どもたちにはお父さんやお母さんの顔を描いてもらい、それがまた子どもたちの印象に残る講座となりました。木炭デッサンなど、あまり体験の機会のない講座内容だっただけに、沢山の方にご参加頂き大盛況の講座となりました。

平成24年度の 企画展を振り返って

平成二十四年度は、一階の企画展示室で二十六の展覧会が開催されました。その中から当館が主催した展覧会を振り返ってみたいと思います。

春四月開催の「幻のコレクション 中国陶磁名品展 イセコレクションの至宝」

は、美術品収集家として知られる伊勢彦信氏のコレクションのなかから、新石器時代にはじまり、明・清の時代にまでわたる中国陶磁の名品を展示しました。質の高さを国際的にも評価される伊勢氏の所蔵品ですが、これまでその全貌が紹介されることはなく、まさに「幻のコレクション」と呼ぶにふさわしい内容でした。なかでも重要文化財「青磁鉄斑文柑子口瓶」は半世紀ぶりの公開とあって多くの来場者につながりました。高円宮妃殿下をお迎えして記念式典が行われたり、当館だけの開催であったりと、話題を集めた展観で、全国から多くの問い合わせが集まりました。

七月には北陸中日新聞と共催で、「孤高の画家 田中一村展」を開きました。濃密



「幻のコレクション 中国陶磁名品展
イセコレクションの至宝」



須田国太郎展 — 没後50年に顧みる —

な色彩で亜熱帯の自然を描いた作品で知られる田中一村は、石川県と意外なところでつながりがありました。羽咋郡宝達志水町のやわらぎの郷にある聖徳太子殿の天井画を制作したのですが、長い年月を経て傷みが激しかったことから、石川県文化財修復工房が修理を行いました。その完了を記念する意味あいもあり、修復工房の技術を知っていたくよい機会となりました。

九月には「須田国太郎展 — 没後50年に顧みる —」を開催しました。美術史家であり、画家でもあった須田国太郎は、ルネサンスやバロックを学び、ヨーロッパ古典絵画の研究を基盤に、西洋と東洋の美の総合をめぐり、その重厚な作風を築きました。風景、静物、動物など一三一点の作品から構成された展示は庄巻で、ご覧になった方からは多くの満足の声が寄せられました。中央画壇を代表する須田国太郎でしたが、石川とのかかわりの稀薄さもあって来場者は今ひとつとの印象で、展覧会の細やかなPRを改めて考えさせられました。



村田省蔵展 — 画業60年の歩み —

新春一月には「村田省蔵展 — 画業60年の歩み —」を開催しました。金沢美術工芸専門学校（現金沢美術工芸大学）の第一期生であり、戦後まもなくから現代美術展に出品してきた村田氏は、現在も同展に出品を続け、後進の育成に意を尽くしておられます。こうした関係もあって、北國新聞の共催と石川県美術文化協会の後援をいって開きました。光風会や一水会・示現会といった日展に出品する団体では、村田氏の薫陶を受けた会員がこれまでのお返しとばかりに、広報PRに努めてくださり、冬場としては近年にないほどの来場者につながりました。関連事業として、ミュージアムコンサートを久々に行いました。「しゅうさえこ 日本の風景を歌う」と題して、村田氏の描く風景作品をイメージしたコンサートでしたが、二〇〇席あまりのホールが満席になるほどの活況でした。村田氏ご本人による講演会も盛況で、郷里金沢の人との結びつきの深さを再認識させられました。



本作は古九谷の五彩である紫、紺青、緑、黄、赤を駆使して、見込中央に大きく鳳凰を描いています。鳳凰の姿態は、東洋画に見られる暁に一声を発する一般的なものに基づいていますが、上げた片足や尾羽の描写は全く独自のものとなっております。本作と同じように五彩で鳳凰をあしらった色絵磁器が存在しますが、鳳凰の足の描写は一般的なものに近くなっている点が興味深いところです。本作は、たとえば顔貌を赤と黄の釉を巧みに調合して生氣を表現しているように、鳳凰という伝説上の鳥を、あたかも実見して描いたような迫真性が、大胆な構図と相まって強烈な印象を与えます。そして描写の特徴から、東洋の伝統的



な画風に精通した画家が絵付けを行ったことが判明します。それだけに、一般的ではない鳳凰の描写が確信をもって行われた背景がいかなるものであったのか、想像力をかき立てられるところです。裏面には紺青による牡丹唐草文があらわれ、銘は天地神明の助けを意味する「祐」となっています。そこには、聖なる徳を持った天子のさきがけとして歴史的に位置付けられてきた鳳凰との明確な関連が認められます。このように、古九谷の意匠には外面的な大胆、斬新さを支える深意があり、そのことが他の色絵磁器には見られない「美の高さ」を現出しているのではないのでしょうか。

友の会受付始めました

三月一日(金)より、来年度友の会新会員の募集、更新手続きが始まりました。お申込みは郵便振替をご利用いただくか、直接県立美術館でお手続きください。
現在会員の方も、更新の手続きをお願いします。

■有効期間

平成二十五年四月一日～平成二十六年三月末日

■年会費

二,〇〇〇円

【主な特典】

- ・コレクション展示室の無料観覧
- ・企画展の招待券進呈
- ・入館料の割引
- ・展示の詳細やその他の催し物のご案内を記載した、美術館だより(本誌)を毎月送付
- ・館内カフェにてドリンクの割引

新しい会員証の図版は、江戸時代前期に活躍し琳派の祖と呼ばれる尾形光琳の「時絵螺鈿白楽天図硯箱」です。



ご利用案内

コレクション展覧観料

一般 350円 (280円)

大学生 280円 (220円)

高校生以下 無料

※()は団体料金

毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(3月は4日)

3月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00

3月の休館日は
24日(日)～27日(水)

広告



明治10年8月、
加賀藩 前田家の出資により創業。

北陸銀行

金沢支店 / 〒920-8686
金沢市南町5-28 TEL.076-263-5131

石川県立美術館だより
第353号(毎月発行)
2013年3月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>



もりのみやこ少年少女合唱団 イラスト: 北陸RAWORKS